

スウェーデンから来日講演会

コラボレーティブ・ハウジングで共に暮らし、共に老いること — 社会的つながりから集合的エージェンシーとウェルビーイングへ —

Living and Ageing Together in Collaborative Housing: From Social Connection to Collective Agency and Wellbeing

講師 Ivette Arroyo (イベット・アロヨ) 先生 (通訳付き)

日時 6月3日水曜日 18:00~20:00 (開場 17:30)

会場 慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 2階大会議室

プロフィール

建築家、MSc、建設・建築学博士

スウェーデン・Lund University 工学部建築・建設環境学科 准教授

研究テーマはコラボレーティブ・ハウジング、社会的統合、住宅形成プロセスへの住民参加など。共同居住の社会・空間的側面、災害後の住宅再建、居住者の日常的な対処戦略に関する研究で国際的に高く評価されている。

専門分野：建築学、都市計画、参加型デザイン、社会的持続可能性。

主なプロジェクト

「Collaborative Housing in a Pandemic Era (パンデミック時代のコラボレーティブ・ハウジング)」プロジェクトを主導。現在は、欧州プロジェクト「Pathways towards Age-Friendly Communities (CO-HOPE)」および、スウェーデンの研究プロジェクト「高齢者の健康とウェルビーイングを促進する中間的住居形態としてのコラボレーティブ・ハウジングおよびシェアードハウジングの計画・開発 (HouseWell)」の代表を務めている。



開催主旨

本講義では、スウェーデンにおける高齢化社会の住まいの課題について、「望まない社会的孤立 (unwanted social isolation)」および「孤独 (loneliness)」という観点から取り上げます。これらは日本とも共通する課題です。

講義では、スウェーデンにおける二つの共同居住モデル

- (1) 多世代型コラボレーティブ・ハウジング
- (2) 人生後半期のためのコラボレーティブ・ハウジング

を対象として、共用空間、自主管理、共有実践が、いかに社会的つながりを育み、孤独感の軽減に寄与しうるかを検討します。

また、システム思考 (systems-thinking) の視点を用いながら、COVID-19 パンデミックのような危機状況においても、コミュニティがつながりを維持し、レジリエンスを保つための社会的・空間的戦略を明らかにします。

さらに、高齢者自身による自己組織化 (self-organization) と集合的エージェンシー (collective agency) が、社会的な可能性を広げ、健康やウェルビーイングを支える日常的な「ケアのふるまい (gestures of caring)」を育む役割について論じます。

講義の主なテーマ

- 多世代共生による社会的つながりの形成 (SallBo の事例)

高齢者、若者、難民が共用空間を共有しながら暮らす「SallBo」の研究を通して、世代を超えたつながりが孤独感の軽減にどのように寄与しているのか、その仕組みについて紹介します。

- パンデミックや危機に強いコミュニティ設計

コラボレーティブ・ハウジングをシステム思考の視点から捉え、危機的状況においても社会的つながりを維持するための社会的・空間的な戦略について考察します。

- 高齢者の主体性と住民主体のケア実践

住民主導の「ボトムアップ型」共同居住が、社会的な可能性や健康・ウェルビーイングに与える影響を取り上げるとともに、居住者同士の日常的な「ケアのふるまい (gestures of caring)」の実践例を紹介します。

開催概要

- 日時 : 2026年6月3日 18:00~20:00
- 会場 : 慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 2階大会議室
神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1
(東急東横線・目黒線・横浜市営地下鉄グリーンライン「日吉駅」から徒歩約5分)
- 参加費 : 無料
- 定員 : 70名 (定員になり次第締め切りとさせていただきます。)
- 共催 : 慶應義塾大学 KGRI KEIO SPORTS SDGs センター
慶應義塾大学 SFC 研究所みらいのまちをつくる・ラボ
- 協力 : グループリビング運営協議会
- 申し込み方法 : 以下の URL または QR コードからお願いします。(5月28日締め切り)

<https://forms.gle/MNkTAg7J3Jnzezc4A>

